
黒猫自転車

アオキチヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒猫自転車

【Nコード】

N5476A

【作者名】

アオキチヒロ

【あらすじ】

ある朝の横断歩道で、『私』は立っていた。目の前の男は立っていなかった。ふ、と思い出した『人生は自転車だ』と言ったお姉さん。『私』にとって、およそ何の意味も無い話。

私が居て、私の目の前に男が居る。

それはこの世界において、およそ何の意味も無いことであった。意味の無い、つまり世界に影響を与えるほどではない。別に何でも無いこと。特に、騒ぎたてるほどのことでも無いこと。

時刻は早朝、場所は横断歩道のだ真ん中。今は私の近くにトラックが一台止まっているだけ。私は立っていたが、目の前の男は立っていないかった。

この世界において、そのような場面はいつ、どこで、どういった状況でも起こり得ることだろう。二つの生物が居て、それぞれが別々の行動をとる。なんとまあ、特に何でも無いことだ。

私が立っていることに、特に理由は無い。座ろうと思えば座れるし、寝転がろうと思えば寝転がっていただろう。ただ、『立つことを脳信号が各運動神経に呼びかけたその結果として、私はそこに立っていた。』

しかし、男が立っていないのには理由があった。正しく言うのなら、立っていない。両足はちゃんと生えているが、男は立っていない。

別に、謎かけをしている訳じゃない。それに、言ってしまうえばこれは謎でも何でも無い。男が立てなかった確固たる理由は、男が死んでいたからだ。死んでいたから『立つこと』を脳信号が命令出来なかっただけだ。最も単純かつ、最も明確な理由で、男は立っていないかった。ただ、それだけ。

横断歩道のだ真ん中で横たわる男を、私はじつと見つめていた。私の右斜め後ろでは、トラックから降りてきた運転手が何か意味不明な言葉を喚いていた。多分、嘆きの言葉か、懺悔の言葉だろう。あるいは罵倒していたかも知れない。運転手は男がもう動かないのを理解し、一歩二歩後ろに後ずさって、すぐにトラックに乗り込み

エンジンをかけた。そしてその大きな鉄の塊と共に何処かへ逃げていった。彼等の行き着く先は、地獄だろうか。

* * *

「人生は、自転車です」

いつだったか、私を可愛がってくれていた近所のお姉さんが言った台詞だった。

「この仮定の中で、まず、人は駒付きの自転車に乗ります。その意図は、バランスが取れないままでは危険だからです。つまり、その『駒』は人間社会で言う『保護者』です。人は初めて自転車を漕ぐ際に、その駒に絶対の信頼を寄せ、全体重をそれに預けます。安全だからです。

その内、人は自転車は思い通りに漕げるようになります。慣れてくるからです。ここで、邪魔になった『駒』は外されます。必要が無くなったからです。人間で言う巣立ちの時です。もつと言ってしまえば、いつまでも『駒付き』だと格好がつかないからです。

次に、人は『交通ルール』に出くわします。赤なら止まれ、青なら進め。いわゆる社会のルールです。この交通ルールは何とも言い難い複雑なモノで、強者は『赤でも進んで良い』という奇妙なルールが発生することがあります。そして、弱者は『青でも進んではいけない』こともあります。そして、ここから自転車に乗ることに疲れた脱落者が発生します。人は彼等を『負け組』と呼びます。

さて、一度自転車の性能についてお話ししますね。自転車は、自分で漕がなければ動きません。動かないどころか、倒れてしまいます。漕ぐことを止める、つまり『自殺』と同等です。しかし、自分の意志とは関係なく事故に遭って漕げなくなることもあります。それは『自殺以外の死』です。病死、寿命、事故他。やむなく自転車

を降りなければならなくなった人達に同情してはいけません。同情よりもまず、自分の自転車を漕ぐことに集中しなければいけません。ここまで来ると、自転車に慣れた私達は『スピード』が出てきたことに気付きます。そのスピードに乗って上手い具合にゴールに着けば、勝ち組です。調子に乗ってスピードを出しすぎては行けません。必ずこけます。こけて、リタイヤする羽目になります。自分の力を過信しすぎるのは愚者の行いです。

これだけ話したので分かってもらえたと思います。人生は、自転車です」

お姉さんはそれだけを言うと、満足そうに笑った。私は何も言わなかった。それもそうだと思ったからだ。ただ、なんとなく理解し難かったのは、私が自転車に乗れなかったからだろう。

「そろそろ、私も漕ぐのに疲れてきたんですよ。どうしましょう？」
お姉さんはまた、笑った。お姉さんの笑った顔は好きだった。私には、その質問に答えることが出来なかったので、やっぱり黙ったままだったのだけど。

お姉さんに、友達は居なかった。だから、お姉さんの話をよく聞いていたのは私ぐらいだろう。文句を言わずに黙って話を聞く私を、お姉さんは妹のように可愛がってくれた。

結局お姉さんは、自ら自転車を転倒させて、私の前から姿を消したのだが。

* * *

雨が、振ってきた。傘を持っていない私は、くるりと男に背を向けた。

片方が生き、片方が死ぬ。それはこの世界において、別に何でも無いことだった。特に、騒ぎたてるほどのことでも無い。世界にお

よそミク口ほども影響を与えない、ごく普通の日常ではないか？ 私達は、知らず知らずの間にそういう世界を生きてきた。今日はたまたま、ソレを目の当たりにしたただけなのだ。

ついさつき。そう、まだ三十分も経っていない過去に、通勤途中の男が生きて『居た』。そしてその隣に、都会に紛れ込んだ小さな黒猫が居た。二人に面して広がる横断歩道は早朝の通勤ラッシュとは思えないほどに空いていたが、信号は赤色だった。

当然、黒猫に信号の意味など露ほども無い。赤信号のまま、黒猫が横断道路を渡ろうとしたときに、象のようなトラックが黒猫に突進してきた。黒猫は、そこで死ぬはずだった。だが隣に居た男が、咄嗟に黒猫を助けようとして、代わりに撥ねられた。鉄の塊で出来た象に、男は轢き殺された。

結果、黒猫は立っており、男は立っていないかった。それがこの話の冒頭。ただそれだけの話である。私はまだ自転車を漕ぎ続けるが、男は自転車からこけてしまった現実。

小さな黒猫は「にゃあ」とまるでお礼でも述べるかのように一声鳴いて、都会の喧騒の中へと消えていった。

(後書き)

黒猫は、自転車を漕ぎ続ける。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5476a/>

黒猫自転車

2010年10月8日15時15分発行